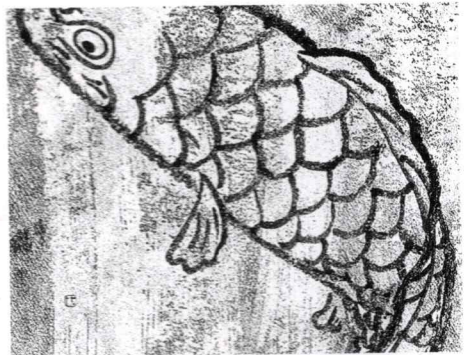


# 朝日 俳壇



北村さゆり (ノボレ)

### 高野公彦選

アルテミス写す地球の美しさ 人種・民族・戦火は見えぬ (川崎市) 井上 一雄  
 宇宙船8の字描き周回す月への探求ああ無限大 (熊本県) 甲斐 一孝  
 「初」と「晩」の柔らかな時がなくなっていく (初) (熊本市) 甲斐 一孝  
 きなり始まる春夏秋冬(春日井市) 神戸 豊子  
 資源なき日本でよかつたかもしれぬ石油が出たらトランプの餌食 (小山市) 大塚 裕  
 ☆妹と休暇を合わせお茶を飲むカフェ2軒分たまった話 (富山市) 松田 梨子  
 合格を知らず電報「サクサク」疾うに消えたりスマホ時代に (東京都) 上田 国博  
 お守りは一体と数ふらし進学を祝ふ神社に五体求む (札幌市) 木下 澄子  
 一人旅したくて勤務表を見る食か景色か西か東か (富山市) 松田 わこ  
 海藻のように柔らかく灌木がわねに絡まる春の藪漕ぎ (魚沼市) 磯部 剛  
 湯葉入れて夫が作りし味噌汁を「すっ」と願いつつまただけ言う (鈴鹿市) 飯場 寿美

【評】1首目は宇宙船が映し出す地球の穏やかな美しさに感嘆し、2首目は人類の探究心の旺盛さに驚嘆する。3首目、晩春から初夏へ、というような滑らかなさを感じた激烈な季節の推移を嘆く。4首目、石油資源は重要だが、無くて幸い、と。

### 永田和宏選

早々に花見切り上げ居酒屋に昼酒となる おそれた通り (堺市) 芝田 義勝  
 わたしなんてわたしなんてと言ったときのわたし (横濱市) 富尾 大地  
 ☆妹と休暇を合わせお茶を飲むカフェ2軒分たまった話 (富山市) 松田 梨子  
 珈琲の香りほしさに妻誘ふ日常に打つ我が句 眺点 (延岡市) 河野 正  
 争心の絶えぬ地球の美しき遙かな月の裏より 見れば (船橋市) 伊藤 早苗  
 人らみなゆつくり動く日曜の鴨川デルタは春をひろげて (神戸市) 松本 淳一  
 酸焼きの匂ひたまたま淡海に異仕掛けゆへ源五郎鮒 (津市) 中山 道治  
 ヨモギ摘み長い場所知ってけるけれど去年も今年も時期を逃した (埼玉県) 永井 久恵  
 授業中に風が頁をめくりたることもなくなる デジタル教科書 (つくば市) 山瀬佳代子  
 摩訶不思議ゼロを乗せばゼロとなりゼロを除すれば無限大なる (東京都) 萩野谷雅樹

【評】芝田さん、よくあることだ。屋に飲む酒はまた格別でもある。富尾さん、「わたしなんて」と謙遜したり卑下したりする時の自分を観察。「なんて」と言いつつ、私が絶対化されてもいるのだ。松田さん、しばらく離れていた姉妹の積もる話。

### 川野里子選

オスカルのような上司が着任し革命前の春の静けさ (東京都) 岩橋戸代子  
 家じゅうのドア閉まりきらず隙間から漏れる姉妹のクスクス笑い (熊谷市) 茂田木智子  
 昏睡の母の気配の近づける 一歩一歩と廊下進めば (厚木市) 本庄 伸子  
 手術後に初めて立ちたりわたくしは箱に立ちたるティッシュのように(八王子市) 額田 浩文  
 ビニール袋に詰め放題の浜の市あまたの鮭が逆立ちをする (逗子市) 織立 敏博  
 高級車並みに輝くトラクター1田に入りゆく口を背負ひて (松山市) 宇和上 正  
 澄みきった美しい声はとときすトカゲ食べたか効果あったか (岡山市) 上野 房子  
 誰のせいーティッシュならけの洗濯物叫んで気づく ひとり喜つしじゃん今 (岡山市) 森山 純子  
 遺骨なき空白埋めんと克明に刻まれている祖父の戦歴 (中津市) 瀬口 美子  
 お月様の裏を通れる船あれど海峡通れぬ船ありまたある (京都市) 藤本かおり

【評】一首目、オスカルのようにデキそうな女性上司の着任。期待と緊張の春だ。二首目、女の家族の気配が楽しい。三首目、昏睡でも存在感濃い母だ。四首目、辛うじて立てたことの喜び。九首目、遺骨発見の縁になれば、との思いだろう。

### 佐佐木幸綱選

線香と花と一台瓶を持ち鳥へのフェリーに乗る放浪記 (観音寺市) 篠原 俊則  
 亡き父と訪ね歩いた巨樹めぐりイチョウ、クスの木ケヤキにカヤと (久喜市) 長村 幸子  
 4番出口に二羽の燕は出入りして新居のことを話しているか (京都市) 清水 希  
 片富士に驚の雪形くつきりと浮かび上がって盛岡に春 (盛岡市) 舟山 治男  
 朝市の焼け跡すべて撤去され光る風吹く更地となれり (石川県) 龍上 裕幸  
 浴室に大きなバケツその中に種炊浸して米づくろいが始まる (前橋市) 都木真知子  
 夙川へ花吹雪舞ひ筏為しゆつたり進む大阪湾へ (西宮市) 谷口 澄  
 命名権買う人ありてふるさとに「神田商店」(横濱市) 島巡 陽一  
 糞」という駅 畦塗りも機械の世とはなりたれど春の田仕事しづかにすすむ (横濱市) 白川 修  
 じいちゃん孫一人の名迷ったらちようど問の発音で呼ぶ (佐伯市) 河北 苗

【評】第一首、俳人の尾崎放哉は、一九二六年(大正一五)に四十一歳で世界。墓は香川県の小豆島にある。第二首、日本全国の「巨樹めぐり」をする父娘。たくさんの不思議な体験をされたことだろう。第三首、燕が巣を作ったのは駅舎らしい。

## うたをよむ 大岡信を詠む

「第2回大岡信記念／富士山俳句大会」が4月12日、静岡県三島市で開かれた。大岡は、文学をはじめ音楽、演劇、美術など多彩な分野で評論活動をした詩人。2017年に86歳で死去した。俳句や和歌、詩などを鑑賞した本紙の読者から「折々のうた」は、1979年から2007年まで6762回続いた。大会があった三島市は、大岡の生誕の地であり、生涯を閉じた場所でもある。

事前に「大岡信」「春」を兼題に投句募集があり、大会では大賞1句と入選11句が発表された。大賞は(富士山俳句)「そそ大岡信の秋 秋田市・荻原都美子」。大岡の忌日4月5日を季語としている。選者の一人である長谷川権さんは「朝、富士山を思いつけて、『ああ、きょうは大岡信の忌日だなあ』と気付いた。それが一句になった。富士山と大岡の組み合わせはびつたりで、句柄が大きい」と評価した。

入選11句のうち、大岡を詠んだ作品は6句あった。忌日を使った作品が4句。(森岡)とばの響大岡忌 横濱市・三玉一郎)「目覚めては富士は歌ふ大岡忌 東京都大田区・趙栄順」(金風もプラスチックもうた大岡忌 西東京市・神谷宣行)「言の葉の花ふぶきたり大岡忌 和歌山市・玉置陽子」三島市を流れる川を詠み込んだ句もあった。(源兵衛川は師のふるさとや春の月 磐田市・一条ユリ子)「折々のうた」が入っている句がこれ。(切り取りし折々のうた初蝶来 神戸市・松川佐登美) (俳壇担当 西秀治)

第25回俳句四季大賞・第14回俳句四季新人賞・第13回俳句四季特別賞 東京四季出版社主催。大賞は、東京都の片山由美子さん(73)の句集「水柿(ふらんす堂)」に決まった。新人賞には、東京都の加那屋こあさん(54)の「ふれ合わず」(30句)が選ばれた。特別賞は、東京都の内村恭子さん(60)の句集「多神」(東京四季出版)。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(欄外2作品まで)。QRコードから

